

新しい保育の試み

北海道



はじめに

重野孝三

本道の私立幼稚園は、昭和二六年頃から、急激な増加をみせて、現在数一六六園に達し、公立幼稚園を合せて、総数一七二園になっている。次頁の表にみられるように、助教諭の数が非常に多く、その上退職による移動もはげしく、教諭の養成機関も私立短大に二校あるだけで、国公立には免許状の取得するところがないばかりか、一

般に給与が低いため私立短大の入学者も少ない状態である。したがって数字の上では、教員一人当り、幼児二四人となつてはいるが、本道の幼児教育の水準は高いということは言えないと思う。

私学主管課では、私学振興のため、教育内容の向上充実をはかるべく二つの目標をおいた。第一は教育施設設備の改善充実の

☆ はじめに

重野孝三

☆ 実際指導

— 座談会 —

出席者 及川ふみ 村井トミ
村田修子 堀合文字
司会 津守 真

☆ 保育実際指導における感想

荒木弥生

ために各種補助金ならびに貸付金、第二に教育の向上に資するための研修補助金などである。道及び私立幼稚園は共催で、二六万円の予算を計上し、八月六日から八日まで、お茶の水女子大学付属幼稚園の指導により、研修会をひらくことに決められた。

この計画をたてるまでに、二年半にわたり準備調査をおこなっていたが、資格取得の認定講習だけでは、退職者が多く、折角資格をとってもすぐ新しい教員にかわるという状況がわかったので、この移動のはげ

私立幼稚園年間の歩み

三三、一 現在

年度	校数	学級数	幼 児 数			教 員 数				
			五才	四才	三才	計	園長	教諭	助教諭	講師
昭七	五	一九四	五八一	一、九五	二四〇	六	四四	一四〇	四	二九三
六	六	二四五	七八七	二、五〇	三三三	六	一〇一	二〇〇	三	四〇〇
五	六	二九五	九一七	二、六〇	三六一	六	一一	一七一	七	五〇五
四	二	四〇〇	一、二五五	三、七七一	七五	二	二二	三二六	一〇	六六
三	二	四九	一、〇〇六	三、六八	七四	一	三	三六	一〇	六六
二	二	五五	一、一八四	三、九三	八〇	一	四	三三	九	七三
一	一	五五	一、四〇六	四、一〇五	七三	一	二	四三	五	七六
計	一五五	計	計	計	計	計	計	計	計	計

キリスト教系	六九	宗教法人立	八一
仏教系	五八	学校法人立	一八
神道	三	財団法人立	二
社会	七	会社法人立	七
個人	一八	個人立	四七
計	一五五	計	一五五

但し三三、五、一現在、同年八月現在一六六園。

しい助教諭のため、実地の保育を参観させて、絵画製作やリズム運動などの練習をおこない、視聴覚と筋肉感覚にうったえながら講義もきき、遠い将来のことではなく、今日明日のために、という追いつめられた方策をとらざるを得ないことになった。

まず指導者の選定には、八〇%以上が宗教関係であるため、宗派に関係のないこと、第二に理論的裏付のはっきりしている保育ということが考えられたが、よほど勇氣をもって交渉しなければ、指導に当たっていただく人があるまいと予想された。

北海道の幼児で実際の保育をして見せて下さいという、とんでもない懇請に、及川園長もさすがにびびくりされた様子で、教諭諸氏に相談しておことわりするということがあったが、全くことば通りムリヤリ懇願をして、しぶしぶながら承諾をしていた。

けたのは幸運であった。その上及川園長が、教諭と共に御米道下さるといふ思いがけない朗報に準備委員は緊張して計画を進めた

八月六日 村井教諭 自由保育 幼児五

〇名 午後保育実際につき質疑応答 別室にて及川園長 両親に対して講演

八月七日 村田教諭 自由保育

午後保育について質疑応答

八月八日 堀合教諭 自由保育

午後 平井信義氏講演

八月九、十両日は絵画製作音楽リズムの練習をフレール館主催で講習会開催

及川園長には特にお願ひして、両親に対する幼児教育をPRしていただくことにした。正しい幼児教育が両親によく理解されない、教育をゆがめられないとも限らないし、現にそうした現象も起っていることを、しばしば聞いている。

平井信義氏を特にお願ひしたのは、この計画の上で大いに意味があった。学校教育法では、幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、幼児の心身の発達を助長す

実 際 指 導

出席者

及川 ふみ 村井 トミ

座 談 会

司 会

津 守 真

村田 修子 堀合 文子

司会 この夏、お茶の水の付属幼稚園の先生がたは北海道へ行って講習会をされましたが、そこで実際に北海道の幼稚園の子どもさんを保育して、こういう場合はこうすればいいのだということを実地に指導されたということを聞き、私はたいへん興味をもちました。環境的にも部屋の点からもこの幼稚園とは違ったところでお子さんを保育したのでいろいろ興味深いお話があると思います。及川先生、まず、依頼をうけた頃のことから。

及川 北海道庁と北海道私立幼稚園研究会という会の共催で、北海道全道にわたり一園から一人ずつ参集して研修会を開きたい

が、このときに北海道の子どもに、東京でやるような実際指導をしてほしい、という依頼を受けました。これは、こちらから行く先生には御苦勞様なことなので、期待にそえるかどうかわからないし、たいへんなことだと思いましたが、この先生三人に無理にお願いしたようなわけでございました。三日間にわたる指導の内容については三人で相談してということにしていたできましたから、第一日村井先生、第二日村田先生、そして次が堀合先生というように話しあつてきめたと思います。

先方では、公開の二日前から現場の先生に来ていただいて、子どもとなじみになる

ると目的が法律でははっきりしているが、取扱では比較的軽く扱われているのではないかと思われる。年令の低下するほど、心の生活が単純になり、反対に身体的生活面が、強く影響することは自明のことで、心身を並べて同価値とする考えは当然である。

ところが、幼稚園教諭の免許状取得のための学科をみると、幼児の身体に関するものが少なく、指導要領などにおいても、極めて簡単に扱っているのは理解に苦しむものである。

個々の幼稚園についてみるに、保健の最も基本的な日光に当るとか、キレイな空気を呼吸させるといふことなど、あまり重要視されていぬ傾きがあり、本道のように長い冬を迎えなければならぬ土地では、雪と温度と日光、空気がいふものが、健康上重要な関係をもつことは当然であるし、保健医も幼児の五五％にクル病の病いがあるといっている。その他食物、伝染病などかなり大きな問題が残されているのでないだろうか。この点をもっと強調すべきものと考えたのである。

(北海道私学宗教係長)